2023 SUZUKA CLUB MAN RACE Round 1

CLUBMAN RACE

2023 鈴鹿クラブマンレース Round 1
開催報告書

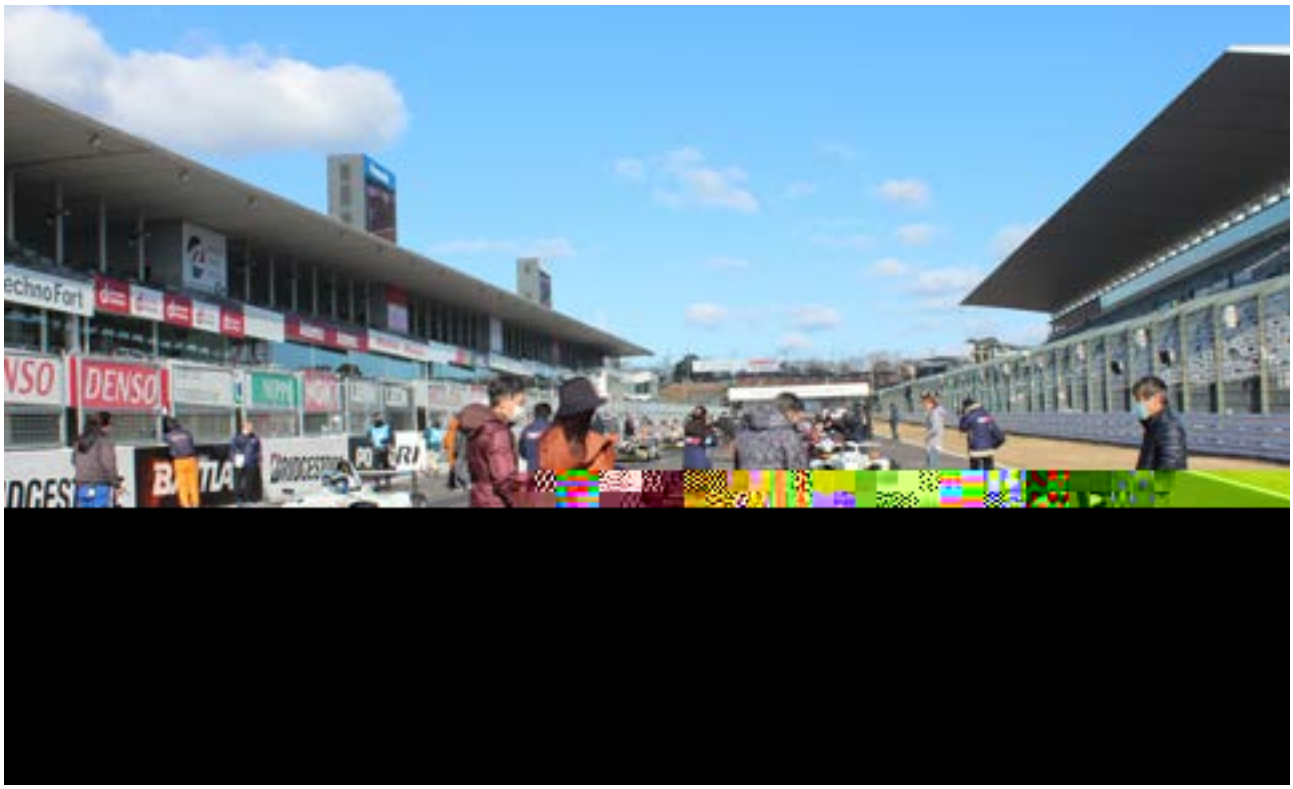
■開催概要

●シリーズ名称　：2023 鈴鹿クラブマンレースRound1
●主催　：オートスポーツクラブアツタ（AASC）・鈴鹿モータースポーツクラブ（SMSC）
サーキットトライアル主催 淀レーシングチーム（チーム淀）
●協力　：ARC、ARCN、KRHC、OCCK、チーム淀
●競技　：JAF公認・準国内格式　公認番号2023-2001
●会場　：鈴鹿サーキット フルコース（5.807km）
●開催レース　：総参加台数……154台
Formula Beat地方選手権シリーズRound.1……14台
フォーミュラEnjoy……16台
CS2……16台
VITA……25台
スーパーFJ……22台
FIT 1.5 Challenge Cup……11台
FFチャレンジ……30台
●併催クラス　：サーキットトライアル……20台
●開催日　：2023年2月25日（土）・26日（日）
●天候・路面　：2月25日（土）・26日（日）／晴れ・ドライ

★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。
https://www.suzukacircuit.jp/result_s/2023/clubman/

■次回レース開催概要

●シリーズ名称　：2023鈴鹿クラブマンレースRound2
●開催日　：2023年5月13日（土）・14日（日）
●主催　：ARC、SMSC
●会場　：鈴鹿サーキット フルコース（5.807km）
●開催クラス　：スーパーFJ、FFチャレンジ、VITA、CS2、フォーミュラEnjoy、FR-J、TCR-J



2月25日（土）の午後に各カテゴリーの公式予選が行われ、翌26日（日）に全決勝レースが開催された。決勝日は8周によるフォーミュラEnjoyからスタート

今年も盛り上がること必至の鈴鹿クラブマンレースが開幕！
各カテゴリーのレースで激しいバトルが展開された!!

2022年の鈴鹿クラブマンレース最終戦が行われた12月10日（土）・11日（日）から約2か月半。いくつかの変更が加えられた鈴鹿クラブマンレースの2023年シーズンが開幕した。

30周年を迎えたJAF地方選手権F4クラスは、「Formula Beat」というカテゴリー名に改称された。「スーパーFJ」からステップアップするこのカテゴリーには14台が参戦。激しいタイムアタック合戦が展開された公式予選、抜きつ抜かれつのバトルが披露された決勝レースともに大いに盛り上がった。

また、「クラブマンスポーツ」は「VITA」というカテゴリー名に改称された。クラス名の通り、ウエストレーシングカーズ製「VITA-01」のワンメイクレースであるこのカテゴリーの公式予選では昨シーズンのチャンピオンである大八木龍一郎がトップタイムをマーク。決勝レースではその大八木が周回ごとに後続を引き離し続け、この日2回目の表彰台の頂点に立つ結果となった。

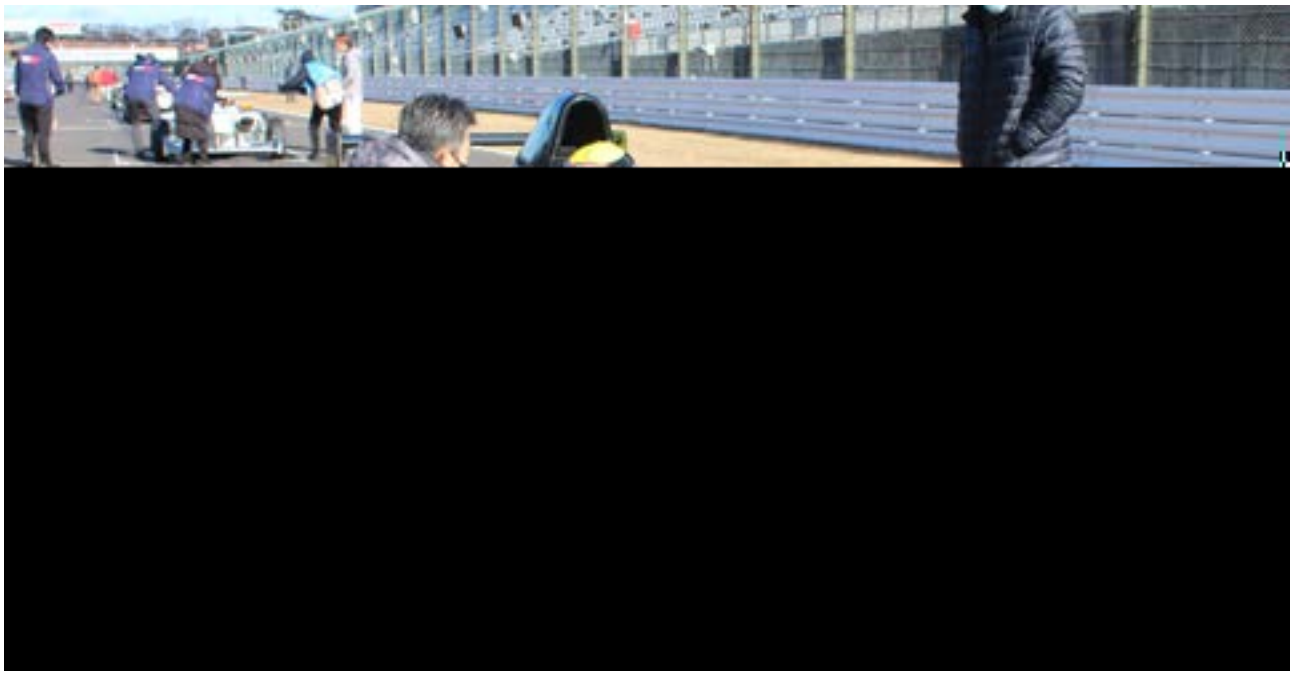
さらに、入門フォーミュラカテゴリーの「フォーミュラEnjoy」、昨シーズンからウエストレーシングカーズ製「v.Granz」と同「WEST16C」の混走によって行われている「CS2」、今シーズンより岡山国際サーキットでのレースを含めた鈴鹿・岡山地方選手権シリーズとして開催されることとなった「スーパーFJ」、Hondaフィットのワンメイクレースである「FIT 1.5 Challenge Cup」、同じくシビック使いたちによる「FFチャレンジ」も公式予選、決勝レースともに大いに注目を集めた。

全5戦がフルコースを舞台に開催される今シーズンの鈴鹿クラブマンレース。昨シーズンも開催された「VITA」と「CS2」の混走による120分耐久レース「MEC120」は全国展開のシリーズ戦となり、ここ鈴鹿サーキットではRound.3にて開催される。その他、様々なワンメイクレースも併催される今シーズンの鈴鹿クラブマンレースに是非ご期待ください。

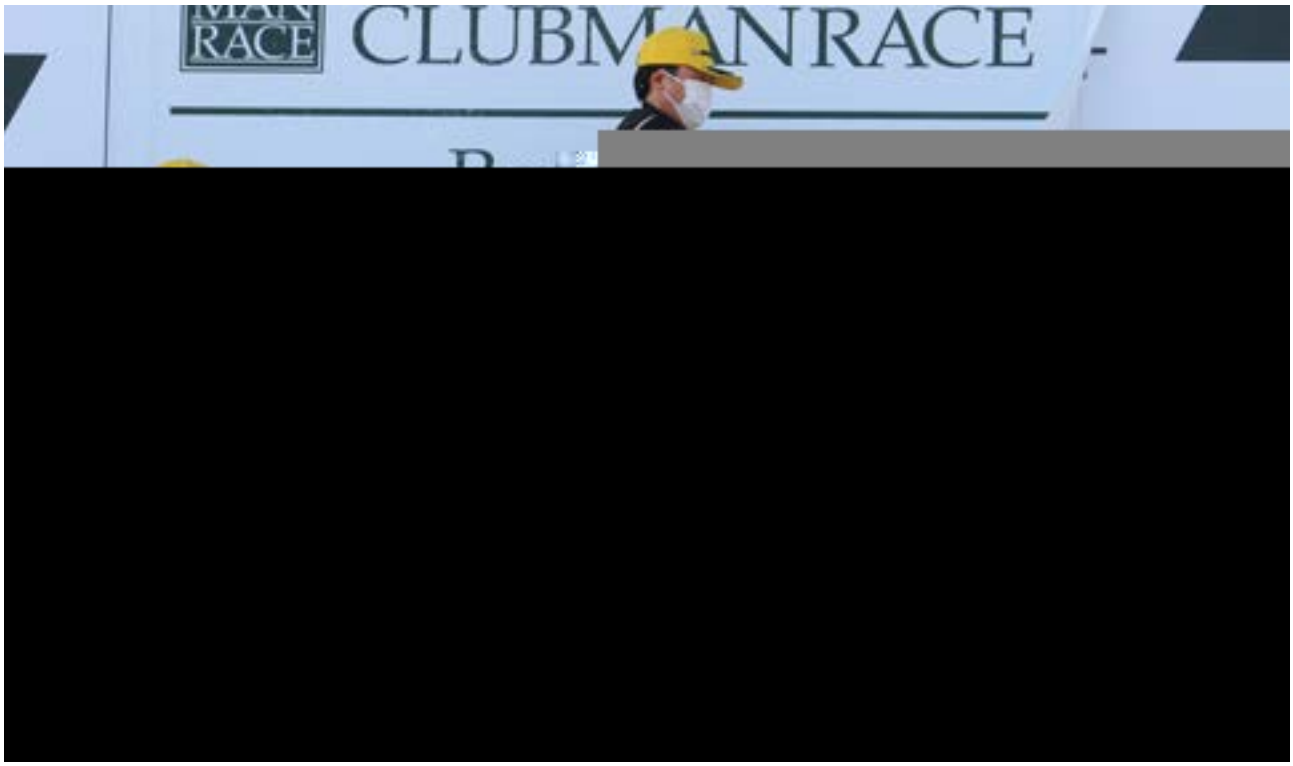
2ヒートが開催された市販車によるタイムアタック競技「サーキットトライアル」には20台が参加。次回は7月2日（日）の鈴鹿クラブマンレースRound.3にて併催

■フォーミュラEnjoy Class

ポールポジションスタートのT.山口が良いクラッチミートを披露してホールショットをゲット。それに2番グリッドスタートの東幸夫が続く。3番グリッドスタートの三浦和貴がスタートでミス。T.山口、東、5番グリッドスタートの安田知弘、4番グリッドスタートの亀蔵のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。T.山口はすぐに単独トップに。2番手以降を引き離しながら安定した走りを続ける。その後方では東、安田、亀蔵が2番手グループを形成。その3台がテールtoノーズのバトルを展開する。クラッシュしたマシンがあったことにより、セーフティカーがコースIN。T.山口がトップのままチェッカーを受けた。



2023年最初の決勝レースとなったこのカテゴリー。T.山口が2番手に1秒868という大きなアドバンテージを築き、カテゴリー初のポールポジションを獲得



セーフティカーランのままレースが終了。T.山口（中央）が一度もトップの座を譲ることなく優勝。安田が（左）が2位、東が3位でレースを終えた

■CS2 Class

2連覇中のいむらせいじがスタート時にマシンをストップ。スタートディレイとなる。2度目のフォーメーションラップの後、レースがスタート。2番グリッドスタートの成瀬茂喜がホールショットを奪う。しかし、すぐにポールポジションスタートの大八木龍一郎がトップに浮上。大八木はオープニングラップから後続を引き離しにかかる。大八木、成瀬、4番グリッドスタートの関正俊のオーダーでオープニングラップを終了。まもなくトップ3台はバラけ始める。大八木は周回ごとに後続とのタイムギャップを広げ続けると、3秒667のアドバンテージを築いてトップチェッカー。2位成瀬、3位関のままレースが終了した。

ポールtoウィンを獲得したのは昨シーズンの開幕戦でも総合優勝を飾った大八木。大八木はフォーメーションラップ前もリラックスした表情を見せていた

大八木（中央）がポールtoウィン。圧倒的な強さを披露し総合優勝を飾ると同時に新規マシンの「v.Granz」による「Gクラス」でももちろんウィナーに

■Formula Beat地方選手権シリーズRound.1

実質的に1コーナーにもっとも近い2番グリッドからスタートしたハンマー伊澤がホールショットを奪う。ハンマー伊澤と4番グリッドスタートの鈴木智之が激しいバトルを展開。鈴木がハンマー伊澤をパスすると、その鈴木、ハンマー伊澤、5番グリッドスタートの加藤智のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。周回ごとに順位を入れ替える鈴木とハンマー伊澤の2台に加藤、7番グリッドスタートの徳升広平、3番グリッドスタートの冨田自然、6番グリッドスタートの大宮賢人を加えた6台がトップグループを形成。次第に鈴木が単独トップに。鈴木が2秒558のアドバンテージを築いてウィナーとなった。

佐々木孝太がポールポジションを獲得したがフォーメーションラップ時にその佐々木のマシンにトラブルが発生。ポールシッター不在のままレースがスタート

トップグループは中盤まで何度も順位を入れ替える激しいバトルを披露。次第にグループを抜け出し単独走行となった鈴木（中央）が堂々の開幕戦優勝を飾った

■VITA Class

　ポールポジションスタートの大八木龍一郎が絶妙なクラッチミートを披露してホールショットを奪うと、オープニングラップから早くも後続を引き離しにかかる。2番グリッドスタートの増本千春がスタートでミス。大きく順位を落とす。大八木はオープニングラップ終了時点で後続に1秒890のアドバンテージを築くことに成功。その大八木に3番グリッドスタートのTOMISAN、6番グリッドスタートの上岡広之と続く。大八木はその後もラップあたり1秒以上ずつ後続を引き離し続ける力走を披露。単独トップの座を盤石なものとする。結局、後続に14秒164ものアドバンテージを築いてトップチェッカーを受けた。

公式予選でトップタイムをマークしたのは大八木。大八木はダブルエントリーした「CS2」に続き、この日2度目のポールポジションからのスタートとなった

大八木（中央）がポールtoウィン。ファイナルラップまで続いた上岡、大山正芳らとのバトルを制し、2位チェッカーを受けたのはTOMISAN（左）だった

■FIT 1.5 Challenge Cup Class

ポールポジションスタートの西尾和早、3番グリッドスタートの松尾充晃、2番グリッドスタートの中西茂希のオーダーで1コーナーへ。西尾はデグナーカーブ一つ目の立ち上がりでコースオフしかけながらもオープニングラップから松尾以降を引き離し始める。中西はオープニングラップのシケインでクラッシュ。松尾には反則スタートによるドライビングスルーペナルティが出される。これにより、西尾は有利な展開に。西尾の後方では清水悠祐、山内拓磨、杉原悠太らが2番手の座を争う。単独2番手となった清水がファイナルラップのスプーンカーブでスローダウン。西尾、杉原、山内の順でチェッカーを受けた。

昨季ランキング3位の西尾が公式予選唯一の2分30秒台となる2分30秒872をマーク。ポールポジションからスタートしたその西尾がホールショット

2021年チャンピオンである西尾（中央）が単独走行となり、そのままトップチェッカー。2位は杉原（左）、山内が3位でレースを終えた

■FFチャレンジ class

ポールポジションスタートの林陽介と2番グリッドスタートの開勇紀が横並び状態で1コーナーへ。林（陽）がホールショットを奪う。林大輔が松下裕一をパス。松下がシケインで林（大）を抜き返し、林（陽）、開、松下、林（大）のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。スプーンカーブのランオフエリアで止まったマシンがあったため、赤旗が出されてレースは中断。リスタート後は林（陽）が単独トップに。その後方で開と松下がテールtoノーズの状態となる。130Rで止まったマシンがあったことにより、セーフティカーがIN。セーフティカー先導のままレースは終了となり、林（陽）の優勝が決まった。

昨シーズンのチャンピオンである林（陽）に開と松下を加えた3台が公式予選でコースレコード更新。2分25秒763をマークした林がポールポジションを獲得した

セーフティカーランでスタートした第2レースを制したのは林（陽）（中央）。リスタート後の1コーナー進入で開をパスした松下（左）が2位チェッカーを受けた

Voice of Pick up Driver

この日、キラリと光った
ドライバーに一問一答